

# 視覚情報記号論レジメ 4

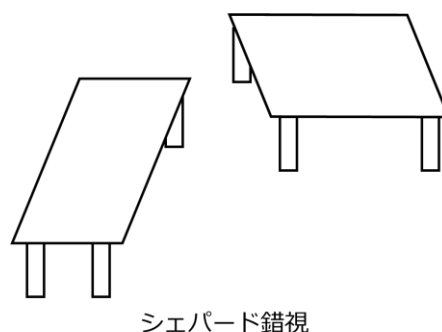
名古屋市立大学 2016 年度講義  
久木田水生

## 1 錯覚

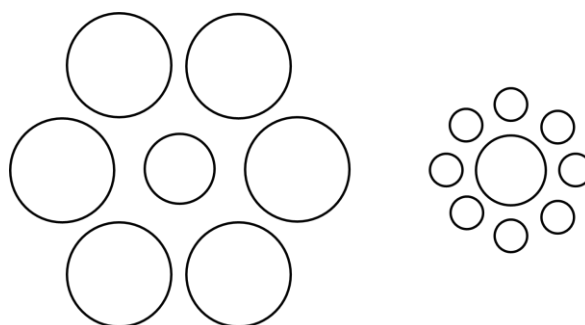
動物は視覚によって得られた外界の情報を脳の中で再構成し、解釈し、意味づけている。その意味付けには様々なバイアスがあり、それによってしばしば錯覚が引き起こされる。例えばシェパード錯視では同じ平行四辺形が縦と横に置かれた時に異なった形として認識される。これは人間の脳が平面的な図の中に奥行きを読み取り、そして手前にあるものより奥にあるものを大きなものとして解釈するためだと考えられる。

錯覚は外界に対する誤った認識であるが、しかし多くの場合は本来、有用なバイアスの結果である。人間は成長するにつれて世界について様々なことを学習する。そしてその結果として世界を解釈するための有用なバイアスを身につけるのである。このことは、ある程度の年齢に達しない子供には例えばエビングハウス錯視のような錯覚が生じないという事実からも伺える。

経験から学習された、確実ではないがしばしば有用な仮説、経験則のことを「ヒューリスティック」と呼ぶが、錯覚を引き起こす視覚における様々なバイアスは、ある意味でヒューリスティックであると言えるだろう。



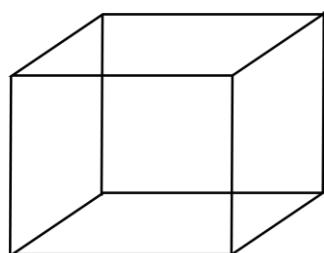
シェパード錯視



エビングハウス錯視

## 2 アスペクト知覚

私たちは物を見るときに、端的にそれを見るのではなく、しばしばそこに何らかの解釈をさしはさむ。すなわち、それを何か「として」見るのである。しかし同じ視覚像から得られる解釈は必ずしも一定ではない。例えば W・E・ヒルが描いた「妻と義母」の絵はある解釈では女性の顔を斜め後ろから描いているように見えるが、別の解釈では女性の横顔のように見える。ネッカーの立方体はどちらの長方形が手前にあるかが二通りに解釈できる。どのよ



ネッカーの立方体

うな解釈を採用するかはその人のそれまでの経験や、そのとき置かれた状況にも依存し、多くの場合は意識的にある解釈が採用されるわけではない。



ヒル「妻と義母」(1930年)